

京鹿子

京鹿子 二月号 丁巳年正月
京都府立総合資料館蔵
山田洋行蔵

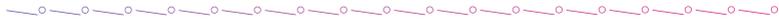


2月号

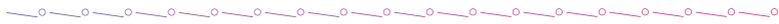
鈴 鹿 呂 仁
拾 掬 集 その 四 十 一



短 日 の 巫 女 の 摺 り 足 砂 利 と ば す
短 日 の 窓 口 の 女 ま く し 立 つ
河 豚 刺 し の 残 り い ち ま い 大 絵 皿
お 多 福 の 御 酌 に な じ む 河 ふく 豚 と 鍋
点 滴 の 刻 む 目 盛 や 春 待 月
冬 の 雷 分 別 顔 の ひ と く さ り



追伸の仮名十二音寒椿
寒木瓜の空は緩まず割り稽古
造反の雲を後目に凍つる空
歳晩の影をつくらず鴛鴦の池
冬木みな日の斑を集め句碑の径
社家筋の何処も翳持つ冬社
雑踏の時を蝕む年の暮
歳晩の風と畳むや紙袋



近詠

和田 照海

冥界

笹鳴や留守寺を守るおかめ塚

冥界の障子明りに闇魔帳

冥界を赦され浮世花終

釘抜の手艶の冷えや地藏尊

声明のそろひ畏し日の障子



松本 鷹根



日矢寒し

枯れ残る野菊の眸内湖映ゆ

割りて干す白菜の芯眩しめり

魯田はすぐ穂を出して余生忌む

楓朱に銀杏黄金に散る浄土

日矢寒し雲棚引きて愛宕秘す

近 詠

塩貝 朱千

青い鳥

第二トンネル抜けて冬雲近うせり

冬晴へ放たむちひろの青い鳥

琴弾山に琴の音を待つ冬ざくら

魯田の広し鳶の輪無限大

塗香のにほふ手のひら柿を剥く

英華採集

どんぐりこつん二重ロックを解除する

習志野 上野 紫泉

例え一つのどんぐりであっても瓦に落ちる時、あるいは窓に当たるとはそれ相應の音を出す。「こつん」の響きが恰もどんぐりの意志があるかのように働いている。昨今、マンション等の玄関扉には防犯上二重に鍵が成されているようであるが、その二重ロックをどんぐりが解除したという見立てが面白い。解除したどんぐりは何処へ行ったのであるうか？空想は広がるばかりである。

湯豆腐の喋り出したら止まらない

京都 鳥居 美代

寒い冬は鍋物に限るが、鍋には豆腐が付き物であり湯豆腐が手っ取り早く出来る料理として人気である。細かく切られた豆腐も最初は鍋の底に鎮座しているが、やがてぐつぐつと煮え出してくると鍋の中で活発に動き出す。その様は早く食べてくれよと踊っているようでもある。それを「喋り」と捉えたところは鍋奉行への合図なのであろう。お鍋を囲むと賑やかになる訳である。このお鍋が河豚鍋であれば尚のこと。

障子貼る我にも一つ隠し事

東京 犬飼 典子

部屋と部屋を仕切っている障子。部屋の中で繰り広げられる様々な出来事を聞いている障子は、その家庭の喜怒哀楽の一部始終を見ていると言える。偶然、知ってしまった夫の隠し事を言わずにいた妻にも隠し事があると言う。「障子貼る」の季語に夫婦の心の機微が揺れている。「我にも」の「も」の助詞一つがよく働いている。

神麓集

抜衣紋 藤岡紫水

しみとほる白絹すずしに蠟や一葉忌
捨て切れぬ男の意地や霜柱
日当りの部屋が特上枯木宿
石庭の白砂にこぼる実千両
餅花をくぐれば匂ふ抜衣紋

春 寒 沼田巴字

春寒や老いには善も悪もなし
水の輪の二つ三つ四つ浅き春
猫柳かがやくいのち芯にもち
白梅やきつぱり生きる志
宝石の眼を持ち帰る恋の猫

水 仙 丸井巴水

一文字姿崩さぬ焼き秋刀魚
退屈なをとこをとかす冬薔薇
冬銀河どつかり錨捨て置かれ
瞬かぬ閻魔と対峙堂の冷え
水仙の拗ねた一本海を見ず

年の暮 植村蘇星

秋深し心を映す川面かな
落葉踏む音の変りし薄暮かな
炬燵出て一つ仕事の増えにけり
そのうちにとは何時のこと年暮るる
平成の名残りを惜しむ年の暮

神麓集

日ぐれ雲

北川孝子

やや寒むの相寄るやうに日ぐれ雲
日の短かさびしきものに耳の裏
日記買ふ便りすくなき友おもひ
やはらかき赤児ほつぺ日の短か
日記買ふ年をかさねて見ゆるもの

果無しごと

直江裕子

人の死を遠い霧笛のやうに聞く
水澄んで人は果無しごとをする
別々のこと思ひつめ紅葉まつ赤
恋終はる花梨ひとつを手渡され
秋天を傾けてゐる海賊船

十三夜

高木晶子

実むらさき色控へ目に御所の内
繕はぬ屋根の上なる無月かな
紅茶派にこだはりの色柿の種
膝丈に残る思ひの赤まんま
機械なら壊れてしまふ十三夜

卵割る

伊藤希眸

雁渡る交しあふ声湖に降り
裸木のくねくね頭(あら)は遊びせむ
閻王の厚き煤被る冬隣り
実千両溢れて老いのだ真ン中
卵割るかへる出さうな小春の日

神麓集

勤労感謝の日 奥田筆子

札の向き揃へ勤労感謝の日
鰯雲一人言には広すぎる
鮠がはこぶ月光とこむら返り
忽と消ゆミヤマアカネも友だちも
病室の壁から寝息月の息

文系理系 井上菜摘子

老いの容ととのへ芒原を出る
文系理系わたむしを手囲ひに
胡桃割るどちらにも肩入れはせず
何にでもなれるはずだつた花野
寝転んで花野は巨きな枢

冬蝶 村田あを衣

冬蝶の振り向きならぬ風の沙汰
きのふけふ冬蝶の影定まりぬ
霧しぐれ生涯遺書は白きまま
灯の奥の人影ゆるる雁のころ
建前はここまで柘榴裂けにけり



特別作品二十一句

円相の山

鈴鹿

仁

円相の山に縁もつ冬うらら

冬の雲記憶の中の人を追ふ

法話聴く大本堂の隙間風

冬ざれの猫の抜け道闇深む

特別作品二十一句

月極の風の中ゆくちやわん坂
廻廊の音の冷たき僧の足
並列の切株正し冬田かな
山眠る風は優雅に西へ吹く
大の字の髭は威をもつ冬の山
あけすけに柚子と戯る湯の火照り

特別作品二十一句

着ぶくれて不自由さの世の途嶮し

冬座敷一茶の軸のむら雀

顔見世の招看板目と眼合ふ

闇鍋の闇の向かふの艶ばなし

糸編む未来へ念ひ母ごころ

草原の陽は宝もの冬の蝶

特別作品二十一句

日を拝し陽を舐めるごと冬の蠅
冬鳥の山より見ゆる街の騒
世の風に耐へ抜きん出る大冬木
意の儘に果てし枯蔓風ばかり
手招きのやうに我呼ぶ枯尾花

〔俳句界〕十二月号転載



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

小鳥来る空より魔女の宅急便

京田辺 山中志津子

新藁の香り一村熟睡す

水澄めり音合はせぬる鼓笛隊
鷹渡る山河は大いなる記号

城陽 鷺山 珀眉

白萩の汚濁の世相清めむと

妣の零すひかりの欠片秋海棠

自分史の終章木の葉降り止まず

秋思ふと水のおつまる一処

京都 井尻 妙子

どうしても逢ひたき人のゐて花野

身に入むやすつぽかされてゐる木椅子

しあはせの番外にゐて胡桃割る

愚痴一つドミノ倒しに月隠る

ぼつかりと痛みの穴や今朝の冬

犬と猫仲よき径の初ささんか

十三夜ひとり満足持ち帰る

大切に日を溜めてゐる冬桜

松の風冬のはじまる声もらす

あなたとの温度差ひらく返り花

人形のかんざし震ふ小夜しぐれ

京都 片山 熙子

遠ざかる重さに開く秋日傘
福 山 亀井 福恵

白秋や供華より低き野の仏

菊を焚きわが好日の香となせり

人生の秋後半がおもしろし

木洩日と遊んでをりし芋の露

荒風に流され木の葉ちりぬるを

天空の城もろともに山眠る

露寒や告げねばならぬ事告げず

銃窓は作句アングルもみぢかな

夕花野空似の翳の後を追ふ

洗ひ立ての空のはにかむ初紅葉

華やぎの中のはかなさ貴船菊

ふる里の小さき傾ぎ秋桜

くつ紐をきゅきゅと結ぶ小春かな

河豚刺身透けるお肌潜む棘

黄落や光背に負ひ過去を負ひ

佇つために汀ありけり秋光裡

歳月の雫となれり流灯会

てにをはに躓いてゐる夕色葉

胸底に昭和一桁しる枯梗

福知山 西村 滋子

京 都 菊池 和子

高 槻 安田 優歌

どんぐりこつん二重ロックを解除する
習志野 上野 紫泉

密約の毀れさうなる龍の玉

紅葉黄葉限界の蓋あけ放つ

立冬の月やひそかに吾を訪ふ

湯豆腐の喋り出したら止まらない

読経には別の声帯雁わたる

石の上に仮説が落ちて柘榴の実

分家して捨てきれぬもの紅葉す

障子貼る我にも一つ隠し事

忘れようそう決めたから石路の花

小春日や言葉の棘を抜いてみる

出かけます一人つぶやき踏む落葉

扇置く探め事納めの奥座敷

刺身食むロシアの姫の小春かな

秋澄みしアリゾナの青宇宙へと
バット置く最後のガッツ天高し

京 都 鳥居 美代

東 京 犬飼 典子

アリゾナ 伊吹 之博

